西の辺境の親愛なる隣人

158532

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

臆病で寂しがり屋で、人として憧れるのはスパイダーマンな転生者さんが、優しい系の神さまに出自と経験と邂逅を調整してもらって第二の命を貰うお話。ただし引越し先は四方世界・オブ・ゴブリンスレイヤーな！

目　次

事の経緯（コンストラクション）――――――――1
既知との遭遇（コネクション・チョイス）――――――7
朝が来る（オープニング・デイズ）――――――――16

事の経緯（コンストラクション）

『諸神もすなる異世界転生といふものを、女神もしてみむとてするなり』

「つまり乗るしかない、このビッグウェーブに！ということですか？」

『話が早くて助かるよ！お互い分かる人とやった方が面白いしね！異世界転生詳しくない人に説明するの面倒だし！』

「転生（テンプレ）ものの利点は話の早さですもんね」

　というわけで目の前にいる女神さま（その胸囲（バスト）は豊満であった）が僕を異世界に生まれ変わらせてくれるらしい。人生どうなるかわからないものだ。終わった後で思い知ることになるとは思ってなかったけどね。後悔は先に立たないというが、どうやら先があるようなのでここは目一杯しておくべきだろう。計画（プラン）して実行（ドウー）して省（チェック）みて改善（アクション）するのだ！

「というわけで己の人生を振り返ってみたところ、二点ほど考えまして」

『聞こうじゃないか！』

「来世はもちっと人に話しかけようと思います」

『そうだね。ボクもそれが良いと思う』

　人に話しかけるのが怖くてそのままぼっちになってたのが僕というやつなんだよな。この広大無辺なウェブ世界を前にしてＴｗｉｔｔｅｒで人に絡むことも出来ず、ＴＲＰＧのルールブックを買ってきても自分で読んだり一人でキャラビルドしてたのだ。野良で集まってオンラインセッションとか、誰でも参加できるコンベンションとか幾らでもあるのにね！

『なんかごめんね・・・幼馴染とか長い付き合いの親友とかいたらもっと自信が持てたかな？』

「いや、もしも僕みたいなのに親友がいたらべったり付き合って迷惑かけまくってゆっくり離れられるよ。僕はそういうやつだよ」

『そういうところだぞキミ！』

　自虐したら怒られた。さてはこの女神さま、めちゃくちゃ優しいな

？

「ところでどうして僕なのか聞いてもいいですか？別に轢かれそうになってる子供とか助けてないし、たくさんの人に幸せを振り撒いたりもしてないですよ。意識が朦朧としてたけど、多分季節の変わり目に風邪拗らせて死んだだけですよね？」

『うん・・・』

「まあ看病してくれる人とか居ませんでしたし」

『うん・・・』

「つまり、もっと立派な人とかそこら中で幾らでも死んでると思うんです」

『そこは聞かれると思ってたし、だから胸を張って言える答えは用意してあるよ』

定番だしね、と微笑みながら女神さまはその豊満な胸を張る。

『立派な人と報われるべき人は違うんだよ。まあボクの主観の話だし正確に言うと、立派だと思う人と報われて欲しいと思う人は違うんだ。評価軸がね』

「つまり僕は立派じゃないけど幸せになって欲しいんですね」

『前者のことはあまり気にしないでね？それはキミ自身が下した評価に則ってるだけだから』

たしか仏教には悪人正機説なるものがあった気がする。悪人こそまさに救いが必要なのだ、慈悲はある。とかそんな考え方だったか。

『雑だけど浄土真宗だね。似たような事は聖書にも書いてある。神の国は貧しき者や賤しき者にこそ開かれてるとかそういうやつ。まあ救いが必要な人って要するに救われてない人のことだからね』

「神さまは生前は救ったりしないんですか？」

『昔は結構手出ししてたしヤンチャもしてたよ？極悪なの鎮めたり、ヤバい連中沈めたり』

この方思ってたよりガチの神様なのでは？

『でもまあ眷属に叛乱起こされたりして、ボクも反省したわけさ。どう生きるかは人それぞれ、自由意志を尊重するよ』

やはりガチでは？

『まあボクの話はどうでもいいさ、キミを選んだのはちょうどいいタイミングで死んだ人たちの中で、ボクが個神的な趣味の範疇で何かしてあげたかったのがキミだっただけさ。深く考えなくていいよ。考えてもいいけどね』
「全人類の中で？」
『全員見てるし、他所に行っても見続けるよ』
「そうですか神さますごいですね」
『それほどでもないよ』
「ネットスラングにまで精通しているのに謙虚だ」
　そうか、見られていたのか。宇宙より広い視野で見ると僕はひとりぼっちじゃなかったらしい。ほんのちょっとだけ来世に前向きになれた気がする。
「ちなみに僕の過去世ってどんなでした？」
「美味しいてつかまきになったよ」
「今後お肉とか食べ辛くなるなあ」
　来世が知的生命体なだけでめちゃくちゃラッキーな気がしてきたよ。
「でも僕みたいな非生産的な誰の為にもならなかったオタクが神さまから凄いパワー貰った力頼みに大活躍してワーキャーヒーみたいなのは解釈違いかなって思うんですよ」
『えー、いいじゃん神様転生！無理強いする気はないけどさ、ボクとしてはキミに幸せになってほしいだけなんだけどなあ。あと流行ってるし』
「特別なことしてないのに特別扱いされるのはちょっとずるいですから」
『ボクの贈り物をずる呼ばわりされるのは心外だな。次にそれ言ったら意味もなくキラキラ光るようなすごいの贈っちゃうぜ？』
「あっはい恩寵（ギフト）です」
　よろしい、と大仰に頷く女神さま。やはり神たるもの人間に会ったら何かしら良いものを振る舞ったりしたいのかもしれない。自分のところで幸せになれなかった者に餞別を与えたい、と考えるなら自然

な感情なのだろう。しかしそういうのを素直に受け取れる人間ならもうちょっとマシな人生送ってたのが僕なのだ。
『分かってたけど面倒臭いなキミ』
「そうでしょうねえ・・・」
『まあここは素直に受け取っておきたまえ。他の神のとこに投げるんだから世界観(レギュレーション)無視したようなのはやらないし大丈夫大丈夫！』
一部の出自(ライフ)と経験(パス)と邂逅とかを骰子(ランダム)から指定(チョイス)に変えるぐらいだよ！と彼女は語る。自由意志を尊重すると言うぐらいだから、その先は僕次第なのだろう。まあそれなら・・・でもなあ・・・
『なりたい自分や憧れのひと、あるだろう？』
そう言われてしまうと思い付くものはたくさんある。どれも実在の人物ではなく創作上のキャラクターなのが少し恥ずかしいけど。
『人間が憧れるのはこれ全て物語だよキミ。それが実在の人物だろうと伝聞や想像に過ぎないさ』
「しかし、うーん。神さまなら僕が何と答えるかぐらいは分かってそうなものですが」
『キミが、自分で、口にすることが大切なのさ。時間をかけてもいいからキミの想いが聞きたいな』
神さまにこうまで言われては観念するしかない。大好きな物語の登場人物たちを思い出し、主に人間性を考慮してひとり選ぶ。
「僕はスパイダーマンみたいな人になりたいです」
『かっこいいし良い人だよね！』
「そうなんです」
そう、スパイダーマンはかっこよくて良い人なのだ。ごく小さなことでも世界の命運をかけた大事件でも関係なく、そこにいる誰かの為に戦うひと。大いなる責任を己に課して平和を守るヒーローに僕は憧れる。スパイダーラックは欲しくないけどね。
「別に大いなる力は欲しくないけど、僕の憧れはスパイダーマンです。ちなみにピーター・パーカーと小森ユウくんと忍殺語使うやつ以外はわかんないです。主にアルティメットなアニメ版が好きです」
『スパイダーバース上映前に死んじゃったかー』

「コミック版、多少高くても買っておけばよかったですよ」
　来世にアメコミが存在することを求めるのは間違っているだろうか？
『ちなみに生き様とか人間性はキミ自身に依存するのでボクにはどーにもなりませーん』
「まあ当然ですよね」
『だからキミ次第でかっこよく生きることもできるよう、努力ではどうにもならない部分を調整するのがボクの仕事だね。命を産むのは神のやること、命を使うのは人のやること』
「そしてどうなるかを見守るだけ、いやいつでも見守ってくれる・・・！」
　自信のない極度の寂しがり屋の僕に、これ以上ありがたいことがあるだろうか。この事実だけでおかわり三杯いけるのでは？どんなに辛い状況でも奮起努力して強く生きていけるのでは？
　・・・いやそれは無理だろう。流石に楽観しすぎだろう。僕がそんなにポジティブを維持できるやつならもうちょっと良い生き方ができただろう。今の僕を包む自己肯定感は一時の高揚感に過ぎない。人間が信仰心を維持するには仏舎利とか十字架とか戒律とか、どうしても形ある証が欲しいのだ。だから聖遺物とか勝手に増殖するんだ。
「ということで神さまと実際に会った物証とか貰えます？無いと多分あーあれはただの妄想だったんだなぁという方向に落ち着くと思うので」
『たしかに人間ってそういうとこあるよね』
「愚かな人類ですみません」
『いやあそれは賢さに分類していいでしょ。忘れること、変わることも大切さ。キミだって無理に義理立てしようとせず、好き放題鞍替えしたり方針転換していいからね』
　すぐに自殺されたりしたらへこむかもしれないけど、と呟きながら女神さまは衣服の一部――青色の飾り紐（ブルーリボン）――を抜き取った。
『必ずキミの元に届くよう手配しよう』
「ありがとうございます」

『なあに良いってことさ、本当ならもっと色々あげたかったぐらいだからね！』
「もし生まれ変わって巨乳に育ったら、その紐で胸を支えます」
『いやそれは無いかな』
　どうやら僕が巨乳になる可能性は微塵もないらしい。細かいところまで既に決まっているようだ。
『というかキミ、哺乳類にならないから』
「マジですか」
『キミの来世は蜘蛛人（アラネイド）だよ』
「さてはガチファンタジーですね？」
　かくして僕は究極のスパイダーマンを目指してアルティメットに生きることになったのだった。おそらく地球ではない剣と魔法の世界で。

既知との遭遇（コネクション・チョイス）

どうやらここはゴブリンスレイヤーの世界らしいぞ、とボクが確信したのは生まれてからおよそ十と半分の時が過ぎた忙しい秋のある日だった。

およそというのはボクが地母神の神殿に捨てられた孤児なので、正確な年齢が分からないから。忙しいのはこの広い礼拝堂が、怪物退治から帰ってきた冒険者のための即席治療所になったから。そしてここが何の世界か確信できたのは、二人の男を目前にしているからだ。

「おうい、こいつも頼むぜ！」

ボクと横に立っている幼馴染――便宜上の誕生日が同じだ――に声を掛けたのは長槍を担いだ軽装の冒険者。今はまだ白磁等級。ボクは彼を知っていた。とはいえ彼だけ見たらここはアイルランドだという線も無くはない。

決定的なのはもう一人、槍使いの男が肩を貸している薄汚い革鎧の冒険者の方だ。左手には傷だらけの小さな丸盾、顔は鉄兜で隠れて、腹部には刺し傷もある見窄らしい男。同じく彼も白磁等級。

その男をボクはよく知っていた。憧れの英雄（スパイダーマン）より彼についての方が詳しいし、なんなら蟲人（じぶん）の生態よりも分かっている。

「小鬼（ゴブリンスレイヤーさん）を殺す者・・・」

「この変なの、俺より早く名が売れてやがる」

「いや、槍使いさんの話も聞きましたよ。なんでも鉱山に現れた岩喰怪虫（ロックイーター）を倒したのは貴方であると」

「徒（アライアンス）党での共同戦果だがな」

「いや、話してる場合じゃないですよね！」

幼馴染の侍（アコライト）祭に怒られてしまった。丈の合っていない継当てだらけの法衣（破れたところを修繕したのはボクだ。この只人（ヒューム）と同じ形の手先は実に器用で、特に糸を使うとなったら右に出る者はあんまりいない）に身を包んだ小柄な彼女は今年で十歳。同じ日に拾われたボクも都合十歳。そして我らがゴブリンスレイヤーさんは十五歳、冒険者デビューしたばかりで傷だらけ、ボクは状況を把握した。

「おう、というわけで忙しいとこ悪いが、街の入口でぐったりしてたこのゴブリンスレイ野郎を見てやってくれや」
　そう言って槍使いさんはボクを見上げた。
「ええ、ここから先は私が運びましょう」
　ボクは片足を曲げて、肩の高さを槍使いさんに合わせる。ずしりとゴブリンスレイヤーさんと装備の重量が移ってくる。街の入口はそう遠くないが、あまり良く思っていない彼を一人で運んでくるのだから、やはり槍使いさんは優しい人だ。
「じゃあ後は任せたぜ、お二人さん！」
「あ、は、はいっ！」
「貴方がした事は必ず伝えておきます」
「やめろやめろ気持ち悪い」
　恐ろしくばつの悪そうな顔を向けたあと、彼は手をひらひらと振って去っていった。とはいえボクはもちろん教えるつもりである。良いことは吹聴されるべきだし、ゴブリンスレイヤーさんにはもっと人間のあたたかみとかに触れてもらいたいから。特にこの頃の彼はヤバかったはずだし。
「それじゃあ運ぼっか」
「うん、あっちの方に空いてる毛布があるよ！」
「案内よろしくね」
　背の高さと頭に八つも眼球があるボクは空きスペースをすぐ見つけられるが、可愛らしい金髪を揺らしながら小走りする少女の背中についていく。まさか彼女が後の女神官さんであるとは思いもよらなかった。
　五年前、つまり勇者が現れぬまま言葉持つ者（プレイヤー）と祈らぬ者（ノンプレイヤー）どもの決戦が起きた年、多くの人々が死に、ゴブリンスレイヤーさんが生き残り、剣の乙女や蟲人僧侶らを含むサムライ一党（パーティ）が魔神王をぶち殺したその年に、ボクと彼女は神殿に拾われた。
　自分が転生者だということを思い出し始めたのが七歳ぐらいだったか。その頃のボクは同年代の只人（ヒューム）よりも小さくて、前世のボクより臆病で水に映った自分の顔を見て怯えたりしていた。（周りの人はす

ぐに慣れて平気になっていった。つまりボクだけこの未確認生命体第一号（ズ・グ・ム・ン・バ）めいたガチ蜘蛛フェイスに耐性がない、おかしな話だ）寝ている時に蜘蛛糸を漏らしてひどいことになったりもした。ボクはそんな感じの弱虫人だったので、彼女がお姉さんみたいな態度を取り始めたのも当然のことだった。

しかし前世のことを思い出したのと関係があるかは分からないが、ボクの身体が急速に成長し始めて、今では槍使いさんすら越える七フィート（二メートル近く）弱まで成長してしまった。もともと蟲人が急成長する年頃だったのだろう、というのが神官長さまたちの見解だけどボクは違うと思ってる。これはあの青い紐の女神さまの恩寵なのだろう。だってこんな大きく育てるほどたくさんのご飯食べてないしね！科学の世界を生きたボクとしてはどう考えてもおかしいと思う。物理法則（ルール）が違うって言えばそれまでなんだけどさ。

「冒険者さん、ここに寝かせよっか」

「オッケー姉さん、頭支えてね。兜で重いから気をつけて。角の断面で手ぇ怪我しないようにね」

床に敷かれた毛布の上に傷付いたゴブリンスレイヤーさんを横たえる。わわっ、なんて可愛らしい声を上げながらおっかなびっくりという手つきの少女に手を貸してもらう。蜘蛛人（アラネイド）といえど手足は二対しかない。それなら頭部のデザインにもうちょっと手心を加えて欲しかったけどね。率直に言って第1話で蹴り殺される顔だもの。

くりくりした青い瞳を懸命に動かして、傷の程度を確かめる彼女の顔と、一仕事終えてきたぼろぼろのゴブリンスレイヤーさんの姿を、ボクの八つの目が捉える。傷付いたひとを癒すひと、傷付けるものを殺すひと、ひとを助けるひとたち。

「この人はあまり重い状態じゃあないかな。とりあえず装備を外して汚れや血を拭っておくよ」

「それじゃあわたしは・・・」

「誰か手の空いてる子がいたら包帯、綺麗にしてきて！」

「行ってくるね！」

「転ばないよう気をつけてね」

年上の神官さんの命を受けて、姉さんがぱたぱたと走っていく。体格差がえらいことになっても精神年齢差が大きく開いても、ボクは彼女を尊敬している。そしてなによりお姉さんぶってる姿がとても愛おしいので、ボクは彼女を姉として扱う。

気を取り直してボクも目の前のやるべきことをする。身体が少しでも楽になるよう、ベルトや留帯（ストラップ）を外して出来る限り装備を剥ぎ取っていく。ボク、あのゴブリンスレイヤーさんを脱がしてる！スゲエな！四方世界にも三千世界にも変なのを脱がす奴とか、家族と勝利したゴブリン以外にボクだけでしょ。たいへん貴重な体験ですよこれは！

このようにアホなことを考えながら――ボクはミーハーなのだ――も手は動かしていたボクの目の前で、奇跡が起こった。

――いと慈悲深き地母神よ、どうかこの者の傷に、御手をお触れください――

生まれてからずっと聞いてきた、生まれる前から知っている鈴の鳴るような、それでいて芯のある声が聞こえた気がした。

「《小癒（ヒール）》の奇跡・・・」

暖かな、優しい光がゴブリンスレイヤーさんの身を包んでいた。彼女が始めて起こした奇跡が、再び彼の命を救った奇跡を、ボクは目の当たりにする。姉さんの祈りと地母神の慈悲が形を成したのだ。

ほんの少し嫉妬する。拾われてから五年間、深く祈りと感謝を捧げてきたボクはまだ奇跡を授かっていない。ほんとの信仰が地母神さまに向かってないんだから当然のことだけど。

負けてはいられないな。そう決意を新たにしたボクの手元から小さな声が聞こえた。薄暗い庇の奥の赤い目と、ボクの八つの視線がかち当たる。

「・・・ゴブリンか？」

「いや違いますけど」

「そうか・・・」

「たしかに肌は緑色ですがね」

よく見たら彼の手が腰の武器の辺りにあった。ゴブリンだったら

死んでたぜ。
「ここは貴方が暮らす辺境の街の神殿です」
「そうか」
「貴方は冒険から帰る道中で倒れて、他の冒険者さんに運び込まれました」
「・・・冒険者」
「長い槍を持った顔の良い白磁等級の方です。分かりますか？」
　彼は僅かの間考えて、心当たりはあると自信なさそうに答えた。
「俺は、冒険者に助けられたのか」
「はい。後できちんとお礼を言ってくださいね」
「・・・そうだな。そうすべきなのだろう」
「貴方の傷を《小癒（ヒール）》の奇跡で癒した私の姉さんにもですよ」
「そうしよう」
　そう応えて無造作に立ち上がろうとする薄汚い男をボクは押し留める。ぼろぼろの体で動き回られると周りが堪えるのだ。
「姉さんやもっと上の姉さんを呼んでくるから、そこで休んでいてもらいます」
　彼はそれでも動こうとするが、腰と左手が床から離れないことに気付く。絹のように白い謎の粘着物がその身を束縛していた。
「・・・これは、蜘蛛の糸か？」
「魔術（スペル）のとは違うけど、ボク流の《粘糸（スパイダーウェブ）》です。ボク以外が外そうとするとたいへん面倒なので、大人しく諦めてください」
　彼には諦める気が無さそうだったが、ボクはさっさと洗濯場へ向かう。侍祭は使用済み包帯の詰まった洗濯桶に手を突いていた。その息は全力疾走した直後のように荒く、額からはだらだらと汗が垂れ落ちる。天上の神と接続して奇跡を起こした代償だ。
「手伝いに来たよ。疲れてるみたいだし代わるね」
「うん・・・ありが、とう・・・」
　長い脚を折り曲げて屈み込み、彼女を寄りかからせて血まみれの包帯を洗う。水を交換して擦り、また水を交換して擦る。
「どうしてそんなに疲れてるんだい？分からないなんて言ったら寝台（ベッド）

まで運ぶけど」
「からだがどこかで、ふわって浮いて・・・だれかに抱きしめてもらったような・・・」
「いと慈悲深き地母神よ、どうかこの者の傷に、御手をお触れください。こんな声は聞こえなかったかい？」
「たぶん、わたしが、言った」
　息も絶え絶えという様子ながら、どこか嬉しそうに彼女は答える。自分の身に何が起きたのかは分かってなくても、どこかで喜ばしいものだと感じているのだろう。別に羨ましくないし？ボクも神さまと会ったことあるし？なんなら物証（プレゼント）貰ってるし？いや親の形見とか残ってない姉さんが寂しそうな顔をするから、実際には見せびらかさないけど。
「上の姉さん兄さんが使ってるのをよく見るから分かるけどさ。それって地母神様の奇跡だよ」
「きせき、わたしが？」
「さっきの冒険者さんに暖かい光が射したんだ。小さな傷も無くなって、もう目を覚ましたんだよ」
「わたしが・・・あの人を癒したの？」
　青い眼を大きく見開いて、か細い声で反芻する。そうなんだよ。姉さんが奇跡を授かったんだ。凄いことだ。祈りで人を癒すとか、ボクの前世じゃジーザスとかがやる事だ。奇跡って凄いんだよ。ボクも無からパンを出したり水をワインに変えたりしたい。
「姉さんにお礼したいって言わせたからさ。包帯洗ったら一緒に行こ」
「言わせたってもう。失礼なことしてないよね？」
「そりゃもう言葉遣いとか完璧よ。第一印象には特に気を遣ってるしね！」
　息も整ってきたようなので二人で洗濯を開始する。水を交換して擦る。水を交換して擦る。
　数えるのが面倒なぐらい繰り返して、これなら替えの包帯にして大丈夫だろう、と二人が納得できるぐらい真っ白にした。新品同様！も

しも《浄化(ピュアリファイ)の奇跡が使えたら、この包帯はもちろん礼拝堂全体も一気に清潔にできるのだろうか？やはり奇跡には憧れる。いつかはなりたい戦神官(ウォーブリースト)。

「じゃあ行こうか。疲れてるだろうし座ってて」

「わわっ、もう。急に動かしちゃダメだよ？」

姉さんの体（すごく軽い！）を右肩に乗せ、洗濯籠を小脇に抱えて移動する。まずは包帯を神官(プリーステス)の姉さんに届けて確認してもらう。小さい姉さんが初めて奇跡を起こしたらしいことを報告すると、驚きと喜びの言葉が掛けられ、ボクには彼女を休ませるよう指示が出る。二人分以上に働きますとも。

「というわけで、こちらが《小癒(ヒール)》の奇跡で貴方を癒しました、私の自慢の姉です」

「姉・・・？」

引っ掻き傷だらけの鉄兜が、ボクたちを不思議そうに見比べる。

「こう見えて自分、十歳でして」

「そうか」

脚を折り曲げて屈み込み、肩からゆっくり姉さんを降ろす。少し怖いのか、ゴブリンスレイヤーさんとの間にボクを挟む。大した握力のないちっちゃな手が、只人(ヒューム)で言うところのふくらはぎあたりをに添えられる。かわいい。

表情の分からない鉄兜が、しかししっかりと姉さんを見つめる。脚がぎゅっと掴まれた。振動感知器官でもある四肢は敏感なので、ちょっとくすぐったい。

「お前が俺を癒したそうだな」

「はい、その、たぶん？」

ゴブリンスレイヤーさんは口下手だった。姉さんが半歩ほど後ずさりするのを広い視野で確認する。

「貴方は何の依頼をこなしてきたのですか？」

「ゴブリンを殺してきた。農村の依頼だ」

「そうなんですか？」

「つまり村を救った英雄(ヒーロー)とそんな彼を救った立派な癒し手(ヒーラー)というわけ

です。お二人とも、もう少し胸を張って良いかと思います」
「そうなのか」
「そう、なんでしょうか？」
　どっちも凄いことやったんだから、自信を持ってほしい。未だ何も成し遂げていないボクとしては、肩身が狭くてしょうがないのだ。
「冒険者さんはこの神殿を知っていましたか？」
「いや、知らん」
「このように傷を癒したり、何かと助けになるでしょう。自分の周りに何があるのか、もう少ししっかりと把握することを勧めます。他にも貴方の役に立つものが見つけられるでしょう」
「そうか」
　一見無関心に見えて、その実、素直な返答。言葉が足りなすぎる。少し呆気にとられている姉さんを前に出す。
「冒険者を、貴方を助けてくれる人はいます。少なくとも地母神の神殿はか弱い孤児にだって開かれています。ぜひ頼ってください。そして世話になったらお礼を言ってくださいね」
　今も周りには沢山の冒険者たちが横たわり、真剣な顔の神官たちが彼らを癒している。いけないいけない、長話をしてる暇はなかった。ボクはアホか。ついつい知ってる人が居たから嬉しくなって、調子に乗っていた。情けないことこの上ないぜ。
「じゃ、ボクは忙しいので後は若い二人でよろしく！姉さんはゆっくり休んでね！」
「えっちょっと！」
　ボクはすっくと立ち上がり、走ると危ないのでこの長い脚（胴体の横側から生えている）を動かして早歩きで立ち去る。いきなり置き去りにした姉さんのお叱りは後で聞こう。自分でも忘れていたがボクは忙しいのだ。
　国や冒険者がゴブリンばかり相手にしてられないのと同様、ボクもゴブリンスレイヤーさんだけに構ってちゃあいけないのだ。あそこにいるのは重戦士さんじゃーんとか思ってちゃあ強いヒーローになれないぜ。知ってる人も知らない人も、みんな頑張ったしこれからも

頑張っていくのだから。ボクが冒険者を目指す以上、全員が尊敬すべき先輩だ。

「ありがとう」

八つ目でも捉えられない真後ろから、穏やかで低い声が聞こえた。その言葉は姉さんだけじゃなく、ボクに対しても向けられているんじゃあないか。そんなことを思うのは自惚れだろうか？いやいやこの危険な世界で生きていく以上、慎重に考えるに越したことはない。調子に乗らず迂闊な期待を持たず、目の前のことをしよう。奥ゆかしさ重点だ。

しかし頭、心臓、手先と体のそこら中が熱くなっているのを感じる。ゴブスレさんばかり特別扱いしちゃダメなんだってば。ちゃちゃっと切り替えたまえボク。

「先輩、何かボクに手伝えることある？」

朝が来る（オープニング・デイズ）

四方世界において、ゴブリンは最弱の魔物だ。十歳の子供でも知ってる通りの事実である。

膂力とおつむは只人（ヒューム）の子供ほど。自分たちの手で新しいものを作ろうという発想は持たず、他者から奪ったもののみを用いて生きる。貧弱な種族だ。

とはいえ、あらゆる能力においてゴブリンが他の種族に遅れをとるわけではない。

例えば暗視。光が無くとも連中は不自由しない。五年前、手痛い授業料を払うことになった。

他には残虐性。同族に対してでも同情することはなく、誰かを嬲り殺すためならば、創造的にすらなれる。これも五年前に知った。

あとは繁殖力。母体さえあれば数日で増える。それらは早熟で生まれつきのゴブリンだ。これを知ったのは五年前ではない。俺に甥はいない。

だから俺の、ゴブリンスレイヤーの朝は早い。ゴブリンと暗所で戦う以上、訓練をするなら夜明け前だ。連中は夜行性だから早朝の見回りも必須だ。連中はすぐに増える。どこに湧いて出るか不思議ではない。特にここは危険だ。群れを形成するために家畜や女を攫う。

幼馴染に用意された自室から、足音を殺して抜け出る。先日の農村での戦いから学んだ、小鬼斥候（ゴブリンスカウト）の痕跡が無いか綿密にチェックしながら歩き、納屋で装備を整えて外れの森に入る。

只人（ヒューム）が持つ最大の武器の１つは投擲であるという。頑強な肉体を持つ鉱人（ドワーフ）や弓を引けば右に出る者なき森人（エルフ）、生まれながらに足音立てぬ圃人（レーア）よりも、物を投げることについては只人が抜きん出る。らしい。圃人のニンジャである師は凄まじく正確な投擲技術を幾度も自分に向けて放っていた。ゴブリンにも個体差があるのだ。例外などいくらでもいるだろう。他の種族については伝聞に過ぎず、直接知っているわけではない。

「いや、鉱人は知っている」

ゴブリンを殺す為の装備を鉱人から買っている。その事実（注1）誤認。親方は鉱人ではなく、鉱人に激似の只人である。を思い浮かべるのと全く同時に、口から言葉が漏れていた。迂闊なことだ。殺したゴブリンの数を数える時のような、意識的な発音とは全く別のもの。

「油断してはならない。すぐそこにゴブリンが隠れているかもしれない」

口にすることで事物への集中力を高め、意識と記憶により強く刻み込むことができる。それを自分に教えたのは姉だった。知識神の寺院では、物事を学ぶための技術と機会が与えられるのだという。冒険者たちが互いの装備品を指差し確認してから出発するところを少し前に見た。

ふと気づくと目的地に到着していた。少し前に蟲人の侍祭（アコライト）から、自分の周りの人間をよく見ろと言われた。視野を広げて情報を集めよという意味であろう。本人はそういう意味で言ってない。　最も重要な知識は無知を自覚すること、学ぶ必要があると知ることであると言う。姉から教わり、先日は見知らぬ侍祭に忠告された。知識の使い道を常に考えることも、師から叩き込まれた。俺は恵まれている。

だが、周囲に目を向けたつもりで注意力を散漫にするのは馬鹿のすることだ。野外で思い巡らせて、気がついたら到着していた？間抜けが過ぎる。

「目の前に集中しろ」

今すべきことのみ、考えろ。

ゴブリンの頭の高さに印を付けた木に向けて、武器を投げる。刀身をすり減らした元長剣を、手斧（ハンドアクス）を、手槍（ジャベリン）を、短剣（ダガー）を投げる。ゴブリンは弱いのだから、ほどほどの一撃で行動不能にできる。数では常に不利なのだから、囲まれる前に頭数を減らすべきだ。敵は暗闇に潜むのだから、光源に頼らず当てる必要がある。

故に練習あるのみだ。ゴブリンの体格は田舎者（ホブ）を除けば共通している。だからゴブリンの首の高さに武器を投げる。走りながら投げる。振り向きざまに投げる。盾を構えて投げる。自分にどんな動きができるか、どの程度の距離なら適当な威力と精度を出せるのか。確

かめて、向上させる。知恵も才能も持たずに生まれた以上、研鑽だけは怠れない。
生まれや育ちは骰子（ダイス）の出目次第だとしても、自分の心と体は自分だけのものだ。思い通りに扱えるよう研ぎ澄まし、どこまでやれるか見極める。
どれだけ投げたか、どれだけ時間が経ったかはわからないが、多少の疲労が出たのだろう。粗末な手斧があらぬ方向へ飛んだ。そろそろ潮時か。そう思っていた時のことだ。
「うひゃあ!!?」
ゴブリンか？
森の中での偶発的遭遇（ランダムエンカウント）。数は不明。手には円盾のみ。音を殺して右へ5歩、足元の剣を引き抜く。多少土が付いているが、問題はない。近くの木の裏に身を隠す。森ゴブリンという名は聞いたことがある。この程度の木なら登れるだろう。草陰に身を潜めているやもしれん。緑の肌は保護色となる。なるほど、森のゴブリンは厄介だな。
ゴブリンはともかく、俺はどう動くべきかと考えていると声が続いた。
「これ手斧じゃん怖っ！ハッ、この粗末な手斧はゴブリンか!?」
ゴブリンではなかった。
「蟲人生初の戦闘はある日森の中でゴブリンとぉ！物騒だなぁ四方世界！初めての冒険といえばゴブリンと聖騎士も言ってたがボカァまだ冒険じゃないぞ！心も技も装備も準備できてないよ初手人型生物を素手で殺すのは流石にハードモードですよ神さま！おっとこんなところに手斧生えてんじゃん引っこ抜こうとしたら折れたわ！」
「俺はゴブリンではない」
今後は事故のないよう、開けた場所で訓練しようと誓った。

「お見苦しいものを見せました」
「いや」

遭遇者はゴブリンではなかったが、緑色の肌をしていた。体表と言うべきかもしれない。身長は6フィート(2メートル)ほど、頭部に8つの単眼と2つの顎。2本の腕は只人とおなじ形だが、体の真横から生えている脚は蜘蛛のそれに近いようだ。強引に〈彼〉のかたちに合わせたらしい、つぎはぎだらけの法衣の長い裾から覗かせる、関節の多いつやつやした脚には鋭い3本爪が備わっている。

街の神殿で俺を介抱した、蟲人侍祭であった。

「朝から訓練ですか。精が出ますね」

「ああ」

「しっかり休んでいますか」

「・・・問題ない」

「戦い続けるには、たたかうだけではいけませんよ。ご自愛ください」

初めて対面したときもそうだったが、自分を見透かされているような感覚がする。格の高い聖職者は物の価値を見抜くことができるという。彼もさぞ高位の神官なのだろうと思っていれば、幼い少女――10歳ほどだろうか――を姉と慕ってみせた。蟲人というものは身心の成熟が早いのだろうか。

「聞いていますかゴブリンスレイヤーさん」

「ああ」

「食事はきちんととっていますか」

「ああ」

「では昨日は何を食べましたか」

「シチューだ」

「それは自分で作りましたか」

「いや」

「ならば作ってくれた方にしっかりお礼を言って、ちゃんと会話をしてくださいね」

「・・・・・・」

「人はみな大なり小なり、誰かの世話を受け、誰かの世話をして生きるのですから、互いに礼を尽くすのは大切です」

「そうか」

「まあ私なんかはどうでもよいですが、身近な人とはちゃんと言葉を交わしてください。ああ、とかそうか、だけでは駄目ですよ」
「む」
　身近な人、と言われるとそれは大切なことだと思う。思わなければならない。どうすればいいかはわからないが、すべきことだとは思う。
「貴方の周りにどんな方が居ますか？」
「・・・・・・俺の帰りを待っていてくれる人がいる。それから、家に置いてくれている人も」
　特におじさんとはもっと話すべき事があるのだろう。つい最近、三叉（フォーク）を突きつけられることになった。どうしてそうなったのかわかっていないが、俺がそうされるだけの事をしたのだろうから。
「んー、その2人だけですか？もうちょっと他に、よくお世話になっている方とか居ませんか？」
「そうだな・・・・・・ギルドに1人いる」
「おお！」
「装備を整えてもらっている。彼に勧められた兜には、何度も助けられた。水薬（ポーション）にもだ」
「惜しい」
　なにか間違えたらしい。少し考えると、心当たりが1つ。
「お前に言われた通り、槍使いの冒険者に礼を言った。倒れた俺を神殿まで運んだことについてな」
「これも惜しいけど、それは良かったです」
「だが、奴は否定した。人違いだったらしい」
「それは多分照れ隠しですね」
「そうなのか」
　人と話すのは難しい。
「貴方を冒険に送り出し、帰りを待ってくれる方がもう1人いますね？」
「・・・・・・受付嬢か」
　蟲人侍祭と彼女は関わりの無い筈だが、想像力豊かなものだ。確か

に彼女には、いつも世話になっている。彼女の仕事があってこそ、俺はゴブリンどもを殺すことができる。色々と指南や注意を受けることもあったか。そう考えると多くの恩があるのだろう。

彼女の顔を思い浮かべて、1つ閃いた。俺が牧場主にすべきことを1つ。ギルドは冒険者の宿でもある。今はあまり余裕がないが、出来る限り早いうちにまとまった額の家賃を払うべきだ。金銭は誠意の形の1つとして通用する。

「受付嬢には世話になっている」

「そうでしょうね」

「色々と忠告も聞かされた。俺は未熟だからな」

「有り難いことですから大事にしましょうね」

「お前もそうだ」

「エッ」

思えば彼は、初めて会った時にも何かと手を尽くしてくれた。とても世話焼きな人なのだろう。神官気質とでも言うのだろうか。今も投擲練習に使った武器を、半分近く運んでいる。辺りに散乱するそれらを、あまりに素早く拾って有無を言わせる暇も与えられなかった。主導権（イニシアチブ）を完全に握られた結果だ。

「見ず知らずの仲なのに、お前はよく面倒を見る」

「初対面から既に超訳知り顔で説教してすみませんでした今は反省しています」

とても早口だった。よくも舌が回るものだ。いや、見る限り人間のような舌は持ち合わせていないようだが。どのようにして発音しているのだろうか？

「お前はお節介なのだろう」

「お恥ずかしい限りです」

「だが、助かっている」

彼に礼を言うと距離を取られた。何故だろうか。